

汀海紗第九

楊姬

卷八

椎本

卷九

綠角

卷十

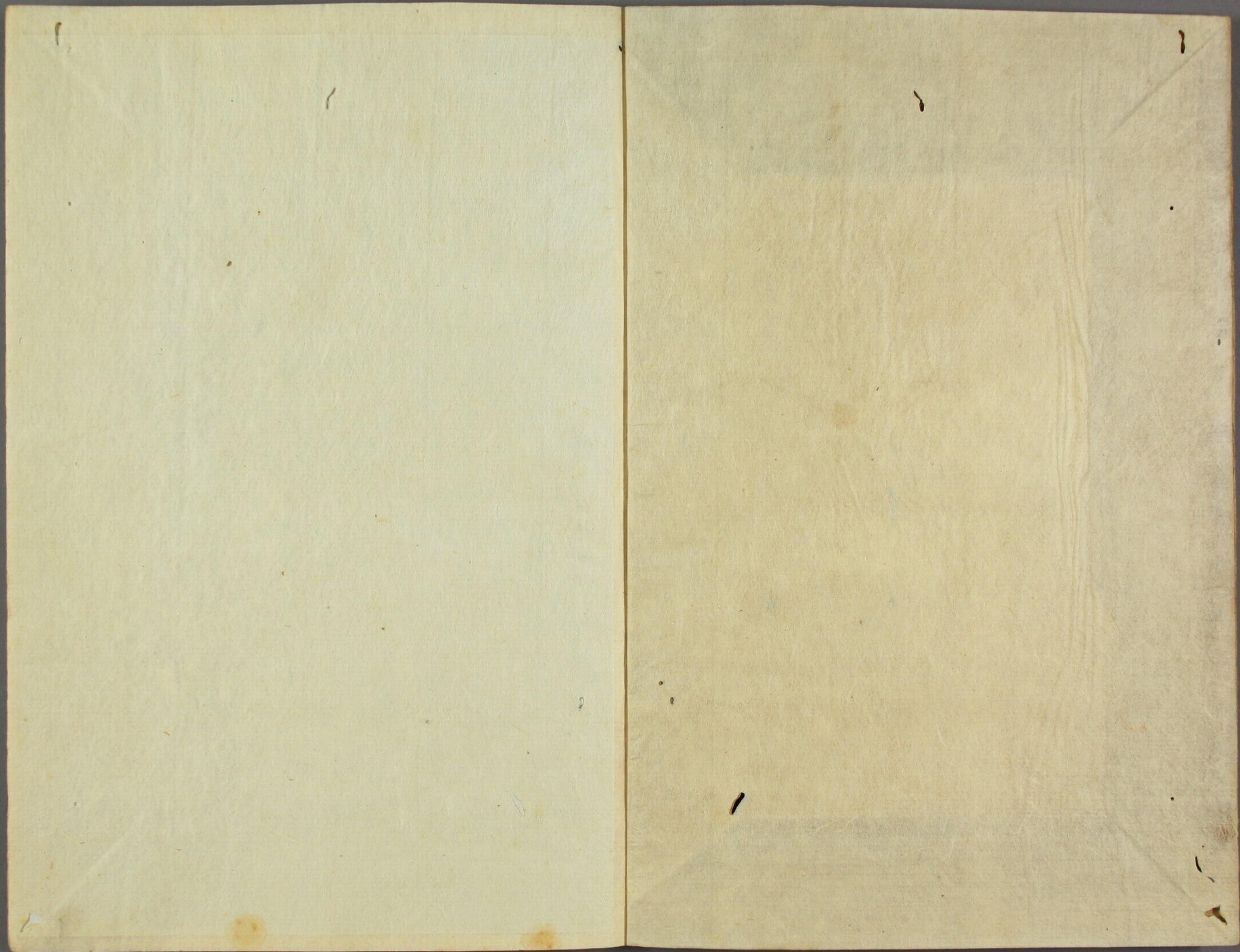
孟生

卷十一

宋方生

卷十二

150 140 130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



河海抄卷第十七

正六位上物語博士源惟良撰

笠原セハ橋姫

ハシ姫心ヲクミテタカモサス棹ノ聲ニ袖ソヌス此哥ノ詞也

一名優婆塞

是又ウツクガラユナフ山ノフカキ心ト詞ニアリ

アセヒセヨウゼミシルズハシルスアメルノリ

宇治宮

桐臺帝第御子也

是八宮亦優婆塞宮母た大臣其比ハ今上御位時也此

時分紅梅卷始詞同也同時之曲也

若君の諱めれど 女子ヲモ若君ト云年ワカキ心也

たゞあざえぐみゆふ 養育也 省ガム

のまゝものとぞと、うへてよひてこられたきき於本ノ、

うづけの諱がさう

持佛莊嚴也

こうじら應んつき

篇突玉篇梁大同九年三月廿八日黃門侍郎兼大學

博士顧野王撰字廿万九千七百七十字三十卷

五百

あくまよハれつけざなうとて 瑞文殊御眼也此故眼石ト云此聲ヲ

六部

假テ硯石トハ書也云々仍此面ニ物ヲ不書也菅家ノ御日記ニモ硯ノ西不
書トアリ ミル石ノ面ニ物モカサリキフシノマリシモツカハサリケリ

故中務宮ノ北方ウセ給テ後ナニサキ君タチヲ引クシテ三條右大臣殿ニ住給ケ
リ御イミチドスガシテシテシテシテニヒトリスクシ給テジカリケレハカノ北方御コトウト九君
ヲヤカテ卫給ハントナンヨボシケルヲ何カハサモトヨマハラカラモヨボシタリケルニイカ、
アリケン左兵衛督ノ君侍從ニ物ミ給ヒケル比其御文モテクトナシ聞給ケルサテ心ツキ
ナシトヤヨホシケンモトノ宮ニナニ渡り給ニケル其時ニ御息前ノ御セトヨリ無キノ
スモリニタニモ成ヘキヲ今ト歸ルケフノ悲サ宮ノ御返事

スモリニト思フ心ハトムレト

鳥ノ子ハタヒナカラ立テイス

カヒアルヘクモナシトコワキケ

カヒノミユルハスモリナルヘシ

ミモリをいたてよもミモリてカレモミツテ 應神天皇十五年甲辰
八月百濟ニ遣阿直岐云能讀經典即太子荒道御師子師等於是天王
問阿直岐曰如勝汝博士亦有耶對曰有王仁者是秀也時遣上野君祖荒田
別巫別於百濟仍徵王仁也十六年乙巳王仁來之則太子師之羽白諸典籍欽明
天皇十三年百濟ヨリ獻經論

一

ウカトアガ 唱哥 唱哥ノ秘事師說アル也

チヅタニモ乃志とヒ

樂察二人乃至 歌師四人儻師四人笛師二人唐國樂師十二人高麗
樂師四人百濟樂師四人新羅樂師四人伎樂一人腰鼓師二人以下
畧之

アヒムカウカタダハ後乃以カクヒ小ハ アナササハ六條院御事也
いまふひかくがながし、シグムヤ 大和物語雲井ニテ余前フルヒハ五月雨ノアメノ
シタニリイケルカニナキ 月ヨミノ光ニキニセアシヒキノシカサ
モカトウ人漁人 海士ナテ川邊ノ漁人ヨニカ可勤大和物語シホカニノ酒六アニヤタエニケンナト
シモアカセスナトリノミユルトキナキ ヨモニツキセスモ中ノウサ

池中蓮華大如車輪也

カイケウの仰ご多き

内教 内典美也

ミモリシモトヨ

淨土

名

居士云身在家心出家俗形ニテ戒

行リ持スル人也四部才子ノ中優婆塞是也唐ニモ龐居辛ト云テ多ク此
類アリ凡聲聞必ス世家ス十地以上菩薩無其儀也

川かくよほしてすと往いとなりかくさくにゆ

万ニナヤヒナ宇治ノ川浪キヨキカモ旅行人ノ立カテニスル

は院ノ御ひどハ十乃御みそたるまへけり

院ノ御門ハ冷泉院

ノ御事也前勘

御門ハ御とつてみて

院号後山院サキ院ノ御門トアリツレハ其心ニ

泣た急て心をもとむかけしとせをうなづく宿をこそわ

被庵ハ都ノタツミシカスム

モラウチント人ハ云ナリ

私あどんと見て差をたふるひづき福とかけハ 宜活川ノ流ノ松ニ夏是テ

奥入ニ此哥同時哥歟不可爲證哥歟云

うばれくかぐれこゑふらのぬうさ心

優婆塞

モトタケノ傍近傍近乃まけ

いじゆたとづくろひたまとは

受持禁戒ノ心也戒行ト惠解トハ

各別ノ事也

ニ

ことばだみてこらめちに 音韻也
迂其說迂 考經

アツニテヤシナバレタル人ノ子ハ

コトハタミテリモノハイニケル

ひがへたほやけずぬいとゆかくあつてあらやうりすの経けらがき御松

ゲモかくえりいきゆくひきもいとよとく々ゆひつゝき

設自帝何益

天仙彈指恥

况彼仕慢舉

高野正覺上人

聖賢割心悲

まきこ人ハ心を乞ひた乃

人應性人アリ又孟子ニモ 善惡トソ

至の日れましむふくいし出づ

骨ヨリ曉テノ月ヲ在明ト云ト云 残テ只朝三テ残月ヲ云カ是モ秋

末ツカタト有レハ九月下旬ノ比タリ能因平枕六十晩ヨリ後ノ月ヲ

在明ト云トソ

うちも不急ねあざと妙手をかほ

親行說

云ニケ干野中トヨムツキニヤ几ニキホニホロクトヲチニタル、木葉ノ露

トアリ野ノ露ナラハ本多ノ露カルトハ心ヘカタクヤカラン且ハ半

治ノ通路山路木立シケキ前也但證本コトニ野中トヤケリ如何ト
云々 水原 案之シケキ野中アーリニイリホカナルカ古歌ニモ

シケキ山ナト、云事アレトシケ木ト云詞未見及野中ニモ木陰ナリル
ヘキニアラス跡中ノ在野中ノ松樹ナトヲホクヨメリ野中ニテ
事タリスヘシ此シケキノ子簡相蓋ノ巻ノ草村虫モヨヲシカホ同ナ
葉ノ後セ

不可用

もを乃まわさ

本ノテ、

ね玉玉のねつよねどうもねののゑ／＼

主シラス香コリタハ秋

、野ニ誰エキカケシ蘭ソモ

わ／＼あ／＼こ／＼にあ／＼人それをけふ／＼き／＼をかきどあ／＼く／＼や耳
かきぬ心らしてゆき／＼もそら／＼ととと

始共鐘調、笛ノ黃鐘調歟琵琶、風香調也、琵琶ノ黃鐘
調ニハアラスカ允琵琶ハ風香調、返風香調ニ秘曲アリ楊真珠流
泉等也仍以此兩調子為琵琶、黃鐘調、笛ノ平調ニアハスル也
掃部ノ貝絃四調ヲ定タリ風香調、合笛ノ黃鐘調、返風香調、合笛

竹あり、よいりこぞりて

立深三間、新草堂石階松桂竹

編牆

集詩

壁色をまよひそぞうとぞうとてはざくにあくわうに

後撰云元良親王ノスミ侍ケル時ニコノテニサクリニナニイレタルハコニカアリ
ケニシタリヒシテ云々

まづれうつ月よりふひとあくわくしよしバ扇をとこす
あくと月はまのとつばくりと

月隱重山す舉扇喻之 止觀

逢事ハカタニ月ノ雲隱

秋ノ夜ノ月カモ君ハ雲隱後嵯峨院御時此物語、御談多有ケルニ以扇
招月、事諸道尋ラレケルニ何モ毎形見後日基長卿云漢書ニ
以扇月ヲニ子ヲト云事アリツトフ立音通スル故也シカニニ寻
フト可心得致 水原 杜詩云月主初学扇、雲細不成衣、注

曰初

謂未甚内申也

不成衣言細也

越曰 李義甫謂鏤月成歌扇裁雲作舞衣

前案之招トアルヲ押テニナフト試ム支スコシ理不尽ニヤ扇ヲ古來月ニ喻タルト勿論ナリサレハ扇ニテ月ニハヨマアレトモ撥モ月六ナルモノナラ子ハ扇ナラテモニ子キツヘカリケリトサノ心ニ何トナリイヘルニヤ次ノ詞ニモ入日ヲカースバチワアリケレトアルモニトニニ子ノ心ナリ學フニハアラサル欲ニヨハストモコレモ月ニハナルモノカハトテトハ琵琶琵琶ノ機隱月ニヲサムルユヘニ月ニハナル物カトハ書タル也

入日ヒツモソドリアモスリル

韓撃難戰魔、醉ス日暮採弋而榜之日為之三舍金ハサホニタセ又史記云魯陽以戈廻落退且奥入又還城樂陵王ヨアヤフメントス日ノ暮ルニ機シテ日ヲ午ニカキヤーストイヘリ
陵王隨舞吹轉云我等故兒吐氣如雷我採順雷踏厘如活石得土刀左得鞭廻日光西歎画沒東西若如月舞示打去綠ニ長田アリ

これも月ヨクシタリモハ

琵琶ノ機ハ隱月ニヲサムユナリ

王元長月詩云於月如可明 李嬌琵琶詩云半月分絃上

興均詩ニ一箭一列作琵琶一自辟規心覺照月

山れかげらよれかふこまふを

古今世ニフレハラキツソニモミヨニ野ハナカヤク心也

うえんづゆくうゑりけひくと
東乃まん注ゑくね食のとみし便トモ仕くねを

人ノ命不停追トモ於山水トモ今日雖存トモ雖保何假心令心令令任惡法

涅槃經

火災經

炎

ト子シト書事ハ棺中ヨリ火火出而燒故炎ト書

リ炎經トヨムトハ佛八十三ニ涅盤シ給故也

よを行ひてつゞく行オバ

キヲラウテ相見シフラカソウハ
トウトイヒツヨワハニケリ

ゆもひさすのゆ忘

巫覡ハ久選トモ男ノ女同

ゆしへに われぬく

金面目也

模尾山宇治也

椎本ニキノ山邊トモアリ

わづく人さうどきうるうれどもそもうく奴リやわん

拾遺長哥順アラタニノ年ハタチニナラサリシ時ゾ山ノ山サムニ凡モサハヌ

友衣ヲタニニタキシ

人をはうごうて

詐 ハカリゴツ

スレウクキのくらふよりてけや

カタチコソニヤニカケル行木

ウゲテクシマニセモホダニヒ

細々許セ一遊山窟ニホワケニキタル心ナリ

反古

ミのふいとまれひりーを

暇日也

唐淳

マレハゼマトモをねひてどと云文字どうもとう

芥君頃見鳥跡始作文

モトシムシルモシムシムナシ

蠹蟲

又白莫和名良

書虫名

衣莫同

答白氏

文集

紙奥日鷗蠹落書棚韓文口杜陵詩積蠹鄧獄釦

生

ハシニキモゼイマウヒタクシハ

カキツクル於千年モアリヌヘシワスレス忍フ人ヤナガラ

六

本
せんこ
彈碁

第廿九

椎本

卷名 立ヨラン陰トタノミシ椎本ムナシキ床ニ成ニケル哉
ミタニナリハリの能多利多利のニエテウセヨヌモアリ

長谷寺、支在玉髣方、卷

ナラメと云人、もありナラ墨ノ名の 本欽未勘出
タニ世ヨ宇治シテ大意欲 ワスラル、御リウチノ中絶
人モカヨハヌ年ノヘニケル 之ニ時ヨリヨキトハシラストヨナリ心竹モ不ト遠方遠近
こもぐ活くたんびのモ葬ども 圖碁 作之 墓

自天竺起之 持統天皇 弹碁 後漢玄梁冥傳註弹碁

入孟嘗君計

三年禁制

當更先彈其局

以石爲之

先勘

先列墓相

ちぢみのゆきのゆきの

沙孫也

一族之心也

ちがひどきの御ごまの
沙孫也 一族之心也

一
りうちあきらかにひけりりやと 桃咲桃ノ山ノナクラ花
け柳をさげ テルサクラアレハ咲桃有
六帖文之 桃川ノ柳水行く
ひんをいりあそびて あくよのびくすつ狂う

醉樂 古示 カスイラクト書タル本モアリ 汗水樂 一越調文 汗

ノ達達ナレハ誠ニ其タヨリアルカ然ハ古本ニ多カニスイラクトアリ若
玄鳴ノ張致亦勸盃ノ席ナレハ酣醉モ其寧ナキニアラス但酒
宴ハ常絃以後ト見エタリ 美テ此曲ヲ賞貲訛ゼシニモ前後凡
ニヤ或説ニハ宇治初道邊也右示ヲヒテラヤサモ不自然致ト云々^後

詞モ水ニソミタ九廊アレハ汗水樂ニテアルヘキトヨホ工侍リ
ひ里ひうち竹づわじやうぶ

普通ノアシロニテ張久

もいりあひてあひて
酔醉樂古示
カスイヲクト書タル本モアリ 沢水樂一越調文
河川鳴
ノ道遙ナレハ誠ニ其タヨリアルカ然ハ古本六多カニスイラクトアリ若
去鳴ノ張致亦勘益ノ席ナレハ酣醉モ其序ナキニアラス但酒
宴ハ管絃以後ト見エナリ兼テ此曲ヨリ賞観歌ニニモ前後凡
ニヤ或説六字詔初度追遙也右示ヨニテヤサモ不可然致ト云々^ハ
詞モ水ニソニタニ廊アレハ河水樂ニテアルヘキトヨホ工侍リ
普通ノアシロニテ張夕
ル席風也昔山癖性トト古ナカシキ洞度六定ニ支也張骨添
竹面片張テ細組ニテ闲令セナル物也遂屏風ト云也又ヒアシロ
屏風ト云物アルカ車ノヒアシ只竹シ日ニ白ク爆シテクニナルモ也
之物歟

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

校人一說

催馬樂呂

催馬樂呂

かぢうをしゆうめりい御
のちうまたうかど 生猿王 此物語毛生王
家無事倫ト有 ヲホ君四位古人正四位ト尺
セリ古今ノ序二人丸ニ三位ヲヨホキニニ位トヤケル本アリソレ
ニキテイエルカ但證本ニヨホキニニノクライトアレハ正三位
無子細是ハナホ君主ノ字也王氏ノ四位ト云心欲生猿王ヲ

卷之三

淮子取人
殿上童

白居易

我宿トタノムヨシノニ君シイラ
ヲナシカサシラサシコソハセト

形をかげりみもあらん

奥入春ノ野ニスミレツミトヨシ我ソ

ムワニシミノ切參差ノ但心ハ同欲

野ヲサムツカシミニ夜子ニケル
咲ノ一本ユヘニ桃花野ノ

普通、本草ハ三十カラ也。若異本ヤ不審

奥入ワキテシモ竹々ラシ秋ノ野ニ

聲を主とすありと

イツレトモナリナヒリ庵花ニ

まほいにらぬ

西ニイソキ帰給心也

うちのむ脚すと乃とぞとも

ソモく辛ノサニハナリカラノラタニモカクソアルヘキ

やけのいへ

ナイカシロノ返事也又ナヲサリ

寧相中ね

立秋中納言ニ成給ヌ

此寧れ中ね竹ハ巻中納言ト

三タリ今亦此秋中納言トアリ仍同時分明也

七月けよ加よクノウニヤニテテ秋乃ニモコモを
多シのひとく風の多シといやうもまことひもづく
きびとせむるや承家ヌ本ノ佐

雜駿曰君門多九重王逸云天門凡

有九重洛陽城闕閨門西向大道門九重也白氏文集曰

門九重闇

みほほの

御扁也

人のまきりゆゑ

氣或本ハラ畧シテ人ケシナリスルニトアリ

ひやくくふ人

撥調

このものやこをひしアリ

子ノ道也

こゑよがんじそろひさぐてさゆひんじさうじたけ

がくじれやたらてまへはうかど

香山大樹緊郡羅於佛前彈瑞璣琴奏八方四千音樂迎葉尊者
忘威儀而起舞出大樹緊郡羅經乾闥波娑王奏樂直得湧弥
震動大海騰波迦葉起舞法華文句第二卷引經傳灯錄

をほひかどたほげどと

垂仁天皇七年七月當麻蹶速

而出雲國野見宿称令搦力二人相對立各举足相蹶則蹶折當
麻蹶速之脛骨之蹶折其腰故奪蹶速地賜野見宿称其邑者
腰折田之緣也

神龜三年令諸國始進相撲人

七月十六七日間相撲召仰也廿六日内取月廿五日大日召合小月

廿七日廿九日拔出テ小月廿八日也諸國ノ供御人ヲメニアツメテ御覽スル也

召合後ニ勝テ御覽スルヲ拔出トエ也

秋ノムク加行モニ宮ノムク也ハ思フシム

悲哉秋之爲氣也蕭瑟兮草木搖落而變衰ス文選秋興賦

秋ハ菩提門ル故ニ物ヲレテ愁ノ心石也

れいの静ムウカリム一念ムとシまサきゆくムんと

傳教大師云當捨惡見諸緣事當尋寂勝菩提心應當速

向蘭善處於彼當成口來

日乃至七日一心不亂阿彌陀經文

かゞカそれミまサくハ一風ムくカうト壽命八千不願出負ク長夜從生死十住親々絶知門狩徒長夜

臺同

いとクかクチクハ

思トキニトリくカ意シハ
誰ニヨリテ藤衣キン

かづカひシまサひハもトねうんト以諸方便示閑靜摄心於得三昧我於諸佛中ノ知一行三昧

所謂念佛也華嚴經也是モ念佛

三昧ト云歟

即ハぞシむカたハほクくテ

シラヌイノツクシノワタハ身ニツケ
ニタハニコトモアタ、ヤニニユ

至ム乃ハはリいトそムやマゆイ一シ出テ

八月廿日程在明ノ

時分前卷ノ月ニ思アズヘシ

いとクかクチクハ泪シもいづクりムけシ

崩シキ太后哭泣ス不下本記ム顔淵死子痛哭之慟

史記曰孝惠帝

哭

ゆム來ル乃ハかづ九月ムもくとハれハもハづクるムを

ツイニ行ミチトハ薰テシキナガト
キノフ今日トバラモハサリシキナガト

神ノ玉キれヒとハれハもハづクるムを

我せオハ今日カアスカト待カヒノ
泪ノ境トイツレタカゲン

まダき行カべトわカそカクハくムニカん

まダき行カべトわカそカクハくムニカん

多シ行カべトわカそカクハくムニカん

本ノノ

伊勢物語

真名本

黒紙 脇扇之折紙也

クロキ紙ニヨルノスミツキ詞、便毎比類者

歎

こゑ、しの宿を、あもむにいとねううーんれ
後撰 三カサウナシナレヌトミニカト
雨モヨニトハ思シモノヲ

さゝくまをこゝま汀としらほどりく打そやめて

篠ノクニノクニ川三駒トナテ
シハシ水ガ影リタニニニ

けりとく 気外

ことくいへばかさうりうき御心のふきみかわ

服者之調度

まうくいとはと
かけくちきやすゆきど

泣衣ハツル、糸ハ佗人ノ
泪ノ玉、緒トソ成ケル
カケテクモカシコキ心ガヌイヘイシキ心或ハ

コトクシキヤウナル心ニモイヘルカ

とほれひす

潤居也

年老とぞくくあくす二志とうせろてのりみ殿みうとく
タビエヌ御心とくわくをえふり

九

水原抄云母君ウセ給テ後トハ弁カ母ト見ヘタリ而給ノ詞以外
ウヤニヒタル不審也云案之母君トハ宇治姫君ノ母ノヲカ彼弁
尼ノ姫君ノヲチノ母北方ノ母方ノヲチ尤中弁カ子ナレハ母弟トウ
マテ後外家ノヨシミニ此姫君ノ後見ニカケルトミタリ

いまハ旅心もとくうりこころ化して

スロハシキセトリ

御神んぞのきどし

御念誦具共

秋音乃もきねまくにいとくくいをとづくと云あくまく

古今 雁ノクルミ子ノ朝キリ晴スノ

思ヒツキヤヌセノ申ノウサ

同 ヒタスラニ我思ナクニラレサ

カリクトノミキリタルラニ

かくたのミゲ、タリ、御をめり今日といひで

ツイニユク道トハ兼テ聞シカト

キノフ今日トハモハサリシヲ

我と人とくき先立ほくともや想んかと

未ノ露本ノ聲ア世中ノ

心をうすぞ

本性ヲウシナハヌ一也

前勘一

レハナリモトモ 菓葉子コーミ ひうひて 多ナシ人トナシヒト 有アリ 好心也
菓子ニアラス 水原抄 案之ニロウハ 菓子ノイタルカ 経文モ採
薪及菓瓶ナトアリ

薪及菓蓏ナトアリ
毛かくそ、若れナクナキシテ、
セニラレハウサナリミニサレミヨシノ、
岩ノカケミナチフミナラシテシ

つゝて 岩れしきを
せニラレハウサナヨリ
岩ノカケミシテフミナラシテニ

此身は御大幸
服者、調度、火桶迄も黒染成へ半歟
室へも入らずと云ふ事無くもあらざりゆ

達虫ノスム里ノシルニアラナクニ
ウラミントノミ人ノイフラン
金づくめてハ立刃川の道

かくみのほ
みづあは
くわめ

火事由興
火事由興

アサクハ人ヲ思フ物カハ
アサクハ人ヲ思フ物カハ

合十ト雪ノ詩ニ
多作レリ

このいばうりづひげとも云ふ

長髮
ヤツラ
鬚也
カツラ
長髮
ヤツラ
鬚也
カツラ

立よし佐とたの久しれかじゆく
カタスカリ向こノ墨三ツ六
秋宿

六帖人丸
ヨントシ毎コトノ夏カケニナレ
シテ
ツミラムクニヤアニミサルラニ
ハ

之子干歸 言株其馬
ニユトシメ ニユトシメ ニユ

催馬樂眉止自安呂
カノヨカニ草カルヲノコシカナカリワ
アリツモ君カキニサンニルサニゼニ

獻之至尊雖有區區之意亦已疏矣與山巨源絕交書枕山
叔夜註曰善曰列子曰宋國有田父常衣濕齋至春自暴

於日當余時不知有廣夏澳室縣纊狐貉顧謂其妻曰負曰之宣人與口之斯狀子名將自當之其三子之日皆入成文

昔吳王大懼於越，乃占卜吉凶，將在胥賈也。其室告之曰：「君將在胥賈也。」吳人有善占者，未嘗不中。及是日，占者謂吳王曰：「君將在胥賈也。」吳王大怒，使人逐之。其子曰：「子卿，勿逐也。」吳王曰：「何也？」子卿曰：「吾聞之，知之者憂，不知者樂。子卿知其不知，故憂之；吾不知其不知，故樂之。」

衆囁之跡彼南山言采其蕨モ詩草蟲

いしのひだいふまいしる

齋紫齊本云

精進潔齋心也

或亦齋食心也

万葉一神カキニムロキ立テイモトモ

人ノ心ハニモリアヌモノヲ

紅盤のじまきしとたほし出で此卷ノ始ニ同サシテ折テケル哉トアリシ

いづことり引てかくし墨も深よ玉板にあくす富札様をイクトカ也

わきすゞれ経よ出法

夏自モ朝夕ス三百物

こきにじきれひとゑみくさんざれ考してもしたる

濃鈍色着黒眼

萱草色一キニタル色也服六善物着

墨あくセ一至ササ子

鈍色ノキヌ也

つまほうなう経みけりたる處

サハラカ前二首

色をかうとくつむきいすひぐらて

翡翠鳥ノ名也ウツクシキスカラタリ

紫乃紙よかきしろ経代序ゆねぬ

紫色カクミ勿論也

亦西服毛通用紙紙ノ色モ同古也紫系上祖母ノ服スキナカラニユキ色ニア

ラテ紅ウス色紫ノチノアキリオレルコウチキ着ストアリ六條御息所

ヲクル、袖ヲナト右返更モ紫ノニタル紙也乙女卷ニ齋院御服ノ時奉テシ

河海抄卷第十八

第三十 総角

卷名

アケニキニカキ契ラムスヒコメテ
ヲナシトフロニヨリモアハナニ

みやうがくのいとしきみだりてかくてもへゆるふど

伊勢集ニ常

名香糸行香机四角結萬絲也

カクテモスル世ニアリケレ
ウム時ナニニ恋ワタルアリウチヲカケ

たゞモイトラカクル物也

万葉

ナヤニシウノミシ給ケリ終ニ三十月八日ナシナクナラセ給ニケレハアサニ

クカナシクテ侍三人モアツニリテ夜登恋ナキ奉レ後ノワサノイ地カク

成テ雨ノイタク降日此アリシ女ハ唯ツホ子ニミソコモリ居タリケル

ウエ入アツニリテ御ワサノニラナンシケクシモナル人今ハヨリハテ給フツ

ナリ唯今何ワサヲカシ給フ爰ニ糸ハヨリにて、今ハ子ヲナンヨリア

源氏ノ文モ紫紙ニタテフミニテ藤花ノ枝ニ付テレタニ

ハビテナキ侍ト云ラコヤタレハシモナル人寄合ヨリアセテ鳴成鼓聲ヲイト
ニシテ我泪ヲハ玉ニスカナン

伊勢北都ミヒツアセハあまけりと

活安房ヲカニキタル裏書云

四條大納言新撰體脇云イセノ御力中務君ニヲシヘケル哥ト云
本朝文粹云徒跣彈琴者問巷穢スニ御俗謂貴女為御蓋

取夫人女御之義藤相公薦ス官故稱其女也管家御作慰

小男女

内スハアリニと賣之げをかぐ乃れをスモト心ホソクモラモホユルカナ
あげましゆかづこりうらをしもといこめて 総角舉卷催馬樂

内スゼハアヌととうづめスケタム久矣

カタ系ヲコナタカナタニヨリカケテ
アハスハナニヨリタニセシ

汝スシテ心づくフニ急呼、人の仰ハムをいとゆく行本
よハシスシテモモカト
カタチツソミヤニカクレノ行本ナレ
心ハナニナサハナリナシ

わにぬあきねがえりスモテアリロニタル心ナリ

心をもむりスシテ久矣

シムル方ナキ也

たアリスゲある木スアリス行スシテ

佐人ノワキテ立ヨル木下ハ
タノムカケナク紅葉散ケリ

松ス乃ス木スをもこそつスシリ山城スしだに

仙人王羌食松

葉不飢壽百七十余年スキテトゾニイル也

笠支荷ス爲衣松葉

爲食沙門隱士行也

こと乃スシスいたりスはるスを

神乃ちスを引スけたまひスを

秋乃ちスをまひスハウスうねスたえどスのづス氣スねスを

いきスるスはれスを

事殘ス也

ヲクシス暗ヌシクリソ佐人
神ノイロスハイトニシケル

迎風吹断ス秋心緒瀧水流添ス夜ス泪ス行

後江相公

の方スに加ス多スレ御佐人スくわくスてこスをくスすスとスしてこスるスを

旅スれ風スぞれれあくスうスを

晨鶴再鳴残月没ス征馬連

嘶行人出白氏文

村名ス乃立スすスをくスくスの間スくスをスれ

村鳥ノ立ニシ

我名今サラニ

いともくへりとねばくしと
ち乃多きをうて、心地いとぞひくをせばうすまゆひのひふま

飛鳥ノ声モ聞ヌヲクシテ
フカキ心人ハミラニナ

秋モハク御くもぐくとぞひと
あげきをたりきよとくへ
そとたいたりんしけつと

利也止宇々たカリ天称田礼止毛ノ呂比安比余計利止宇々
加々利安比久利止宇々舉卷口催馬樂大宮

亦立ヌヨモイロトヨ色
た傳註三尋一喪書
本滋同音

八尺爲尋

かが月も五つん御くも

やうれしと

心得シ

おもきせとひあらすゑにけて、身を心ともせぬをもむ

様カニシキト忘歟カニノ詞ニヨリテ所ニ隨テ
男女初會合忌正五九月ニ云

どくぜられ終ひぞ

不動也

ふる一乃花モ一乃花んこ、かうけろ

世中ヨウシトイニテモイワクニカ
身ヲハガクサン山ナシノ花

けぞうに

顯證也

ひくゆきにほり出まくをもむ

等寄也策也

云霞をやひゆど、来てうねはる、仙人以雲霓爲裳衣久選

老皺

○いまと

蝶卧

ひくゆき神をほきたてありとぞしと

能因哥枕云人、冲サクル神ヲアラニサキ亦アラニカケト云荒神

ノ吉良秋皇御孫尊スナヒトヨシトニシタニシニ諸荒神此國

ヲ領シテ螢火、耀ワコトシ五月蠅ノサクカコトクツトニトヨニケリ

又草木岩石迄モ皆物云此荒神ヲハ大貴神素盞尊御毛

領シ給シ也

万葉哥イ本ニ玉カララニナラヌ木六千ハヤフル

神ソツクテウナラヌ木毎ニ

もうちももと

齒透也

あべくもにもわぬ枕ノ枕かきど

ナガシトモ思リテヌ昔ヨリ

アフヘカラノ秋ノ夜ナレハ

ツバメアヒミツトモハシシムシテ

遠壁暗蛩無限思戀巢寒葉未能歸

オもぬけほづき心比也

打わのぬくみ乃行つうにくくとたは

サカニラニ夏ハニチサノキナ

進心サカニラ心日本記ニ

か御下枝をわきてそれうちし始よりづきりぬきらむとばをや

雨コソ秋ノハシナリケレ

ことうひみくさこつまつる

れ御下あすみこざめぐんうと人よりたかじ小舟め

た舟でし 瑶江漕キナシ小舟ヨキカヘリ同シ人ニヤ急渡リナシ

あべてやかどひたゆしきこゆきバ

足引生浦トリノリシタリヲ

山どうの心比ノ

長崎三夜ヨニトリヤモニ

よもとをあわせんと切りしゆゑ

アモモカニ

ワカ草ノ新キ枕ヲニキソトテ

ヨラヤヘタニニクカラナクニ

每為

十四

三毛ノミクシ 中童アルテイセ

雜役也

こよひにまく風くりやと 本ノミ

因しばれみてそれをもかれ 本ノミ

こよひのじよるひいと 本ノミ

めしもむすびをとねがゆ、

木舟にじ舟のうそみけふ、波のゆ浪

ゆうゆう黒いくるんとねもううさこく

破上フルノ山里イカナラン

ヲチノ里人カスニテ、 宣和殿哥合

とを山とくよてあきぬ

みちやうくよびうぐべしわかと御帳帷

たかまづりをとひうじ、序れやえをとそ 本ノミ

かいせんらくと云物をかうそ

ま、あすみのうみれ心比して

海仙樂 亦海青樂 黃鐘調也

イカナレハアフニテ海ノカールテア

スミルメノタエテナヘ子ハ

蟋蟀居壁

月令

尋子來ル身シトズハヨザノウミニ

身モナケツヘキコニチコソスレ

明石 中宮大夫

あづろれいともんをせとそろりてちて、乃高弟みくは西
りてあすを 六帖貫之 紅葉ノ流テトニアシロハ
いもれ 岩カキ紅葉

眞山ノ岩カキ紅葉キリスシ

テル日ノ先ニルトキナクテ

石ヲ垣ノヤウニツタル也

岩カキ紅葉

岩ヤキ清水ト玄

テル日ノ先ニルトキナクテ

石ヲ垣ノヤウニツタル也

ほこひよのゑかむ印へかく

イテ人少トノミソヨキツキ草ノ
ウツシコロハイワコトニシテ

さい五ツの傳をえと妹なうんをへる石の人のじもんとい
ううきうそ

本ノニ、

おまめのさんゆとひがひ初とひとほきへらへらんを

伊勢物語ニ昔四ツ妹ノヲカシキヲフナリテ

ウラワカニチヨケニ見元若サ

ト聞ヘケル返シハシナナトメツシキトノハ

ムスリモトシキトノハ

ウラナクモキ思ケルカナ

琴事伊勢物語

無所見在大和

物語

ううかくのとといひづ始末とざして

以前返歌也

タラキチノ親ノイサメシウタ子ハ

モノヲモトキワサニツ有ケル

分國にしけしけつけうとえまゆうねばく

代風

九華帳深夜悄々今反魂香夫人魂夫人之魂在何許香煙

引到焚香處

白氏文集四

李夫人ウセテ後漢武帝甘泉殿

裏ニ彼ノ貞子面

ニテ方士ヲニテ靈茱ヲ合セシメテ

金爐焚シアハ

香ノ煙ノ中ニ夫人ノ姿ニシ一也

あもゑねせぬもつにかをへり

明日シラヌ我身ト思ト暮テ

今日人ソツカナニカリケレ

岩角山井ノ木ヲ結アケテ

タカタナシキ命トカニル

カニエモ今モ昔モ行未モ

カクシテニツル折ナカリキ

ううづくとおゆふかくして

近曾

夜居

法師ヅス六人にてかみの念佛勧んほくまつを侍

阿弥陀念佛ヲ云ニヤ

掌不輕をもんじげせゆりてに

我深敬

汝等ハシマ不敢慢軽所シ以者何汝等皆行菩薩道當得作佛。普去
華經不輕品#釈尊因位不輕菩薩トシテ號七四字文得唱ハシマテ四衆ヲ礼拜シ給ヒシ也是切衆生之佛性有故ニヨカミ給ヒシ也

まぐ

詣テ也

いとなくとくつも

礼拜之吉支也

スカウクト云也

ゑづくハシマもんじ

廻向也

こよ乃行ハシマリ

豊明節會也

日本記ニ宴ノ字ヲトヨアヤリトヨナル云々何ノ宴安ヲモトヨノアカリト
ハ云シ但是ハ立節豊明節會ノイ也

せ小御ハシマて

イタリ例遠例ソムクナトイル也

あもとももあらむ

伊勢物語ニ出テコシサモナ

シ足起ハシマテナケトモヤヒナシ
くかくりのやうふてこうわざくまくばと

ウツセミハカラヨミツモナクサナツ深草ノ山煙タニタテ

十六

孝養也

ゆきもれつやをどこゆきこけぬとさうをいふゆ。

乞ハシマ

薰大持ユルシ色ヲ着シタルカ紅ニラツル洞モト

アドヨツハ先カ氷トケヌトハ洞ニヌレタルヨシニヤ袖ノワラナト云也

固乃紅ゆろし色にゆ

よの人のとこすハシマくすみ云ゆる志をものほ取れくりく

さへ出づを

物シハスノ月夜ヲウナノケサウヲウナトハ嫗ノ支也在端老ヲ

ル女也

向乃ち乃後のこゑ枕ヲひだり、今もまねとひそひそを

遺愛寺鐘歌ハシマれ聽ハシマ香爐峯雪ハシマ櫻簾ハシマ看樂天

山寺ノ入相ノカチヲキテトニ

今日モケレヌトキハカナキ

ゑ宿ハシマておねまのめヲこみ写ハシマれしよやゆヲをかき

ちうバ形ハシマきをしゆえむヲがくことつもと一オヲかく

也其由本哥定テ可有歟猶可勘

今ハとぞいふし人あくしをてんを

伏見大和國セ

日本記云安康天皇崩菅原伏見野中葬
スカ原ア伏見ノ御荒ニヨリ
笠忘ハテントムシタナニ此伏見トイアルカ宇海ナ
本音ハ大和三管原伏見ト云斯也

坂本歌ニテ菅原院ヲ伏見ニ云歟

シラノヨナルセ是ヲ

歲乃高峻乃立とみそろすとをのぐここよりてたにあ

春霞立ラミテ、行雁
花ナキ里ニスミヤナラヘル

ヲノカトコヨトハ歸雁ニヨセテイルカ

常世日本記 蓬萊山也

清輝くしかづくありゑこと勿ればほき捨たまに

カキアレハ舍ヌキスヘル衣
ナキモノハ泪ナリケリ

みうごもあくこ心比テモ死

除服事也 服ヲヌリ也

河原ニ出テ解除ル也アサキハ兄弟ノ服三月カキリアル一ナレバヌ
キステ給ヘニ心ニハ父母ノ服ノコトクニ著ハヤト思ハル、故ニアサ心地スル

ト云也

十八

中此モテとおほき毎以泪ノ川又あおれわざも多き也
モヨホサル泪白ニアヌ、御ワタリ詞、奇絶無比類歟
始末ハカリケテ、人とのひとくまへりきこゝ急終矣

古姫君更也

やととばうむとひり、んねくちを 今ソシルクルシキモノト人待シ
此外ニ宿リハガレスシト云々有致只翁詞ニモ云ヘキナリ

志やむしのと心をほどくし終、どちらのツ切経

月アラヌ春ヤ昔ノ春ナラヌ

我身ヒトツハ本ノ見シテ

神ぬき 朧ハウルぬ匂レモ詠也

垣越ニ散ケル花ヲミルヨリ
子ユメニ風ノ吹セコサナシ

いとみる君てのびは余乃はく

ニクサノニス田ノセノチナハ

イトフニユモニアリケル
かべのをと思ひてあらひが

アヤシクモイトフニシル心哉
イカニニテアドモイヤムヘキ
スガノ我身ヲノウキアラニ
ナテモウラニシル哉

もやびりゆく 閑麗又窈窕 文選

文閑 白氏文集

文勝脇

よどてゆきでじゆくと思とあづきせよかんとのゆふ 本ノテ、

人ふあひうきを三ねろ神乃御ヌ獨りゆきをたゆく逃出フ
カラ衣袖シノ浦ノウツセ貝ムナシキ急ニナシヤ經ヌラニ

あがくすくぬさるえみとゆれやうすすら浦ヌゆく御地

心カラ浮タル舟アリ初テ
ヒトニモ浪ニヌレヌ日ソナキ

され乃をよそくこよだるめうしろしおりと

君ト秋イナナルコトヲ契ケン
昔ノ世アシラニホシケレ

五　　き　　う　　き　　さ　　そ　　を　　も　　あ　　い　　う　　を　　お　　も　　う　　な　　川　　ゆ　　か　　け　　て　　ゆ　　く

九條右大臣集

東三條入道攝政大臣歿

カル世モ百ケルモアラヒリ身

身フ宇治リトヨモヒケルヤト

コロミニナヨカリタムナニタガハ

ウレギセニモナカレアフヤト

よふたまざり行心

將先

とみづくニ移ア給ク多中々

不女縁

殿ハムモトミナリサキ草ノ
ミツハヨツハニトツクリマリ

をアカシゲルやと近くひよくしたれて

取カヘスモニモカナヤ世中ヲ
アリミナカラノ身トヤ思シニ

万葉

アキテニヤニホノ水海三漕舟ノ

二三

モイモニアイ見テ

三哉

アリテ娘子死テ後人丸歎テ讀タル哥也ニナテルヤニホノ水海トハリ

ミノ惣名也喻ハ久カタノ空足引ノ山ナトウケル心ナリ如此詞ヲハ

サケ物ト云

紀本

北哥大畧同物也然而先達語之イヤ、万葉歌

取スニテ非難云 中古近モ法性寺閑白クニワヤニノ浦ナ

テト詠シ後德大寺大ノ大臣ナカテノニヨリキテミレハナトヨニレ

タリ或亦伊勢物語ニモハナテヨミタルマリニ書テ万葉歌

アニタアリ淺香山ノ哥以下也作物語ナトハ然事常夏

欣空蟬巻ニ勘付一トニル水海ノ惣名欣ニホテルヨナシ心欣

湖ヨハシナテルトヨニ光ヲハテルトヨムイ本

白氏文集ニ湖光ト

カケリ此支欣万葉ニシナテルヤカナアスハカドモヨナリヨタシ

十モロミナト云アルニヤラシテルハ臨海也亦於和哥有三品

第一シナテル國事也第二ニヨシテル虛海ノ一也第三ホニテル

湖海ノ一也就是重ケノ說多在之此哥尺大概如此

シナテルヤカタヲワ
アスヤ川トアリ本ニ

いひくとまゆゑ

腐也

二条院乃様をスナクよしゆう、陸とアキラヒヤモミツ

心ヤモムヤカドヒシテ、ごうちもすうて、ウエテニシ全ナキヤトノ桜花

谷フカミ見ル人モナキ櫻花心ヤスクヤ風ニ散ラン

れど、じら乃ゆゑハ

寢實也

第卅二

宿木

寄生

卷名 ヤトクキト思山スバ木下ノ旅寢モイカニサニシカラニシ

一名 白鳥 カヲ鳥ノ声モ聴ニニカヨマトシケニワケテ今日ソ尋ル

それ、乃所有臺と云こゆる、故た大房ノ跡小久

柄板ニハ麻栗景トアリ 相遠ヲホツカナシく

いづくに日を送、たゞ、さそがきかんよう、うそとて、こゝり、先

鋪日不如甚竹ス、軍、送春、年唯、有酒、銷日不過甚正月三日

延喜七年

正月三日御忌朝覲、大臣等曰還御時可寂寥、官園甚行幸也、大臣甚其問御観

持懸物有好馬則石扇、或部卿親王与大臣甚其問御観

別當春野牽鹿毛御馬立庭中二扇給大臣勝

もとこゝつもわハ

賭ノリモノトハカケモノ也

あももさキ

かくし、だじとも

丸女イニテレハカリ

ナトテカクアフカタミニ成ヌラン

堤ツヨシハトヨシノ宮ニツキ初テ

水モラサシト契リシモーラ

セクヲヘスレト水モラサス

貞信公

あせら乃ら細々のこゝも、の四方をも

じ、ちもんツアリ、乃、な、付て、だ、反魂香、前勘

ま、アリ、を、れ、み、る、

心、う、れ、し、や、め、

や、く、ね、ぐ、ぬ、で、キ、ナ、タ、シ、色

ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

本ノ、

伊勢物語ニ昔色好

本ノ、

シタ、カナル心也

ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

本ノ、

あくまよきとくほのゆゑをかくらう

東朱達
壁言日反之在條恒雖尽不倍

詣曰朝蘭者世謂之木槿

或謂之日及也

遊賦十六
歎

さた乃院二條院事也三條宮ヨリ北ナレト也

あそきども西アヒヌクと

本ノテ

心引ひてゆきやうかきびり

北画ハ女房ノ居住スル方也北ノ方

行ひゆき引といとあづびてこことひくつぞ

与君結新婚夫婦ト成ル心也菟絲附女蘿

古詩蓋蘿

松ノコケ也

松蘿之契

夫妻ト云フ也以下同他句

伊行天眞入水原

何ニカシル花トシラニシ

今案之是ハ中宮ノ女ノカタヨリシテ此文ノ心タコイフキニアラス

朝顔ノ本哥可勘付

庭セハ翁セハシトシテソイシアモスルテナシ

里ソアレテ人ハフリニ室ナマ

庭モ蘿モ秋ノ野ナル

故院失絶ては二年もうのあよせをうしさ絶し候候の院也

六條院道世シ給ケルト此詞見

六条院すと

毛詩云北堂儒者レ表紙也裁萱草能忘憂

此政ニ萱草ヲ忘草ト云也住吉ノ岸ノ忘草モ北草也今ニ神供ト

此草ニテ裏テ供云

を乃うそくハヤドハツリヒト

山里ハ物ノ佗ニキーフソアレ
サノウキヨリハ住ヨカリケク

猪進

矣せニモアラニ我身ヲナリモカリ
アラカルモニヨモヒニタル、

人數モ少ナシアレ

案内

コトニトはせてム乃月五ノアリテ

人殺

遊仙窟

推ノ葉のととみにむくとねが

家ニテハケニモル飯ヲ草枕
旅ニシアレハシイノハニモル

月乃ちハシメハヌを後撰第十云月ヲウクシミ哀ト云ハムナク

ト申人アリケハ

獨寐ノ宿シキニ起居シ

讀人不知

食まつ西つて化シムタキハ

アリシテヌ命ニテノホト計
ウキコトシケクモハスモ歌

身をこうもまにすてにうましぬ^{リキバ}

クリスニヌモナキナハ立ヌヘ
人ニクカラヌ世ニシスニ立ハ
イナヤ尼イヒナキスウキ物

身ラ心トモヤス世成ケリ

あまううづしげゆふ藤につまうほりれた身を本ノ、

ひとぐき^リげゆうと

カコツセ

日く^シのなく^レ急^シし乃^ハ法乃^ミ急^シく^テ

日晚^ノ鳴^ルナ^ニ思^クシス^ト

思^ジハ^シ陰^ニアリケル

海^士も^シうも^シけゆうと

ひだいやつ^キいのむ^シかど^うり^ゲみ^テう^シと^えら^いう^き

たふた^ハ小^花う^れそ^うど^も。いま^アく^セま^セせ^りそ^りら^い身^を

経^テ 本^ノ、

サ^シも^シや^シか^きせ^さバ^を

閑川^{アリイ}會坂閑川寛平菊合^二

アサリコソ人ハシルトモヤキリノタユル心ハアラシトワラモフ

た^ハ身^ハ心^ハ身^ハど^リた^ハ身^ハベ^クタ^ク

人^ヲアヤ^ハニヤニ^ハニ^トモ

チラ思道ニヨイケル哉

モヤハ^シう^き人^ハツラキアラカル

モニスム^アノワレカラソウキ

取^リアスモ^ニモヤナヤせ中^リ
アリシナカラノ我身トモシ

ウ^シく^シも^シぞ^シゆ^き思^シく^シま^シも^シげ^シは^シか^クく^シ

ナラ^ハ字^ハノト^ハヌモワラカ^ハス^シキニコ^リ神^ハス^レケ^レ

い^シく^シと^シゆ^きれ^シび^シく^シか^ド

御^ハく^シと^シゆ^き理^ハく^シね^シく^シの^シか^じ

身^ヲシレハ^ウラミヌモ^トナ^シモ^ク

コトハ^リシテス^ラサ^シラ^シニ

ウ^タヤニシキハ^水ノアハヤ^ナ

み^シか^シ中^ノ衣^トた^のを^シか^シゆ^きせ^シと^シ

も^シア^シた^シお^シせ^シと^シ

け^シア^シた^シ胸^トく^シぬ

い^シき^シも^シを^シか^シゆ^きせ^シと^シ

く^シう^シた^シよ^シか^シと^シ

ど^シく^シわ^シと^シゆ^きく^シと^シ

水^鳥ノシタヤスカラヌ思^ハ

アタリノ水モコボラサ^リケリ

ウ^クセ^サ思^フ心^ニカナリ^シカ

誰^モ千^トセ^ノ松^トラ^シクニ

コニシサノカモリタニアル世成ヤハ

ツラキ^シテナケカサラ^シ

意^ハヌ音^ツタニキ^シカニ声^立テ

イツコナルラン音^立テ

綾^科 絡^古也

アタリノ水モコボラサ^リケリ

ウ^クセ^サ思^フ心^ニカナリ^シカ

誰^モ千^トセ^ノ松^トラ^シクニ

コニシサノカモリタニアル世成ヤハ

ツラキ^シテナケカサラ^シ

意^ハヌ音^ツタニキ^シカニ声^立テ

イツコナルラン音^立テ

むすめはあらんじてほくに経をつとめてひこかし
竹の舟

白氏文集曰香爐峯北有寺号遺愛寺。寺者高宗
皇帝有寢愛王子至七歲忽薨。不堪哀傷建立堂舍。王
子形安置其寺。草堂記盈焉。古又漢武帝初喪太子夫人甘泉
殿喪令寫真丹青畫出竟何益不言不笑愁殺人君。丹青
具ヲモニ影冠事。武帝以童仲君李夫人貞作溫石
ヨシヤキハヤハラカナル石也。

ト氣が以ゆし又うたそみにしけりと心化す。

忘セシトミタラシ川ニセシ板
神バウケスモ成ニケルガナ

杜詩云毛延壽ト云人王昭君ノカタチヲ繪ニカキシテ金ヲ一テ貞
ノロキ后ノカホヲ目出度カキ昭君ノウツクシキ貞ヲハ金ヲ卫サ
リシカハロクカキタル也。仍嫁君ノ貞ヲモ金ヲ卫サセスハロクヤ
カニスラント也。イ本昭君若贈黃金賄定是終身仕帝王江相公詩

こぐれどもこぞうかと後りたゞを竹やと

比らきをよれとせたるたくみとけりとさすなむ

げの人もぐか

忍まつみときたくうなりづ

ヒタクタクミーイセ云可勘付
結ヲハカタニノチタニナカリセハ
ナニ、忍ノ草ヲツニセシ

とうみうみしたまれあもとをゆくよハ心アシキ

又齋來詣虛上下東極天海跨蓬壺見寂高仙山上多樓

閣西廂下有洞戶東嚮開其門署曰玉妃太真院傳陳鵠

いとうちづけかきど喰ものたくみ水をうがいて

けせずふ

いたまんたら心あねば練

つと竹中も秋乃風ハキラフとほくかばゑひつと

秋吹ハイヤナル風ノ色ナハ身三云計人ノ戀ニキ

ホノ露本ノ栗マ世中ノ
オクサキタワナリテニ

昔ノ人のゆくらひ經居よきつう所をいこぼたしも分

けゆそぞくゆきと

比屋疲人無處居憶昨平陽宅初置

呑併平人

幾多家地仙去又々作梵宮漸恐人家盡為寺

西朱閣 刺佛寺 寝寢
多也白集四

昔ヨリを逃てゆきをほんとあまされとくひよけ
てけり人も觀音勢至回位、昔人子ニテ^{タマ}シニケルニ繼母ノタチ
ニコロサレケレハ其親アハ子ヲクビニカケテ歎ニ^頭カ終ニ佛道入給ケルト
經文在云

キドウト乃ミテ入行

聖道門事也

推古天皇十六年甲子

正月戊午始用曆日

こすものとせ
暦博士
えちうまいのりつわとせくふゑぐのとくはめをし
くらへあすけりんいとくづく
何ヲニテ身ノイタツラニ老ヌラン年ノ思シソカナギシ
こだるかととくにとくせおて 木端^烟ワタタクニ也
やどり木とそひでモハ木下の旅宿といふふしくさき
寄生也

いのほの中とくづく

雁ノクリニ子ノ朝キリニスノミ
ヲモニワキヤヌセ申ノウサ
イカナラン岩ボノ中ニミハヤハ
ゼノウキユトノキコヘコサラン

我身もとのとそ

大ガノ我身トソウキカラニ
ナヘテノセラモ恨ツルカナ

花の中よひとくふとぞ一絵て、あなぐにみころ、花りでたれ
夕べぞうしつかゝ急天人のかけとぞ、むじれてそくへもくハ

不是花中偏愛菊此花開後更無花 元稹
臣庭前靈物降居樹上託前庭遊小兒詠此詩教作書之本
意盈字一兼譜^{琵琶}授秘手曲小兒醒^{廣義武之靈也}
亦天人琵琶^{授玄上石上流泉曲}亦天人琵琶^{シラリハ}詠^{アリト}物語ニアリト

般若^{法華}空乃本^{般若} 中宮ト云

ハセ乃海うたひぬ^{伊缺乃宇爰乃リ}支^支支^支名安支^支支^支安支^支
企^之保^加安^支企^之保^加安^比企^之名^{利曾也}川末^{利曾也}川末^{利曾也}年宇^{利曾也}
加^也比^{呂波}安^也年^也多^也未^也安^也比^{呂波}安^也年^也イ^也海^也
催馬樂

ほくじどこと

作物所
繪所

ホトトコト
かをくわとうりの小直物也

縣召或京官除目以後

執筆直物ヲ申給也。或行除目以後兩三月經テモアん也先度除目參着之更等ヲナラス故直物トえ也其次ニ書イシレヒアん也

あざやうかひをしもくノいつく経ヒテたゞテたゞれを
いづきノまハ人ヒトらを給ツブシレシテ不ハよシしたそ
まハイクとト親王尊者例也大將初任饗食之尊者兵部卿官ヲ請申タル也例可勘ル

あんゲ乃ハこトだハ食ミれタゞギ

垣下公ニ列シテ公事ヲトルル親王也

大饗

昔ハ衣ハ不ハねレ、ヒトニ十キ、トそレせニこリりハ内メのハいシみハ地チこのハづシみハ日ヒつシかドぞ

天曆四年閏音立日此日自中宮給產鉢息所前衛重七枚面打敷等用蟬翼右銀錄笥署上洲演等酒壺貝具如例有男女房饗食冬用朱基盤荒純食

七五

十貝皇子御衣十襲立具唐綾立具平綿縷

納深折櫃四合置中

取二脚九條右

互相記同記曰當年第七衣姬宮政設饗食饅息所御

膳衛重七前繻面打敷

御誕生記也有銀以用同四種箸上洲演亦有酒

壺具一具亦親王公卿七前每前饗打敷四枚基手五十貫

御誕生記也有男房饗食冬用朱基盤荒純食

純食立具冷泉院

御誕生記也四條抄曰石衛門府奉基手錢盛机三立前

古使異別置高官人取立

王卿傍新依副令停正堂依例或有圍碁之奥此間或府督勸不之

大箱ノ本ノ本ノ

辛日大箱ノ本ノ本ノ

大箱ノ本ノ本ノ

辛日大箱ノ本ノ本ノ

事也天曆四年八月昔日儲宮降誕之後當百日依世俗例供

御餅朱小御基六基御己筋乾ノ何葉四種以上銀器二基唐菓子八種二基餅

八種一基四種以上盛平盤

九條記

五十日或一百日供

餅

朱小御基六基御己筋乾ノ何葉四種以上銀器二基唐菓子八種二基餅

八種一基四種以上盛平盤

九條記

わづきはとうよつやうにうくひもゆゑううう

ヨリツハ神コソ包^ヘ梅花

アリトヤ爰ニ鶯ノ鳴

せちぬとくらう

節分^{卯日節也} 延喜二年三月廿日

御記云此日大臣於飛香舍藤花下有獻物事大臣凡獻物稱官根獻御贊可為作御息所宣旨別當也而後列坐藤花下不設酒數巡後大臣殊仰右大將令獻題自飛香舍藤花和歌則大臣置御硯匣奉手跡匣暫獻橫笛鑿其橫笛箱是美和逢物耳酒不皿間舉群臣酩酊竹管絃歌舞亂石敢固親王脩前从忠房令吹笛暫給祿群臣有三庄シヤハミナク也

三ノしのぬニ生き 琴德譜立卷

雜琴譜百七卷

見在書目云

藤村濃打敷

銀楊器或茶器

雜行記
親ノ

進食日本記第七

おちぬしのぬとくらう おちぬしのぬとくらう
おちぬしのぬとくらう おちぬしのぬとくらう

進食

廿六

四ノしのぬとくらう おちぬしのぬとくらう

漢書曰女子公主

注曰如淳曰公羊傳曰天子嫁女於諸侯必使諸侯同姓者主之故謂之公主百官表列侯所食曰國皇后至所食邑也帝姊妹曰長公主

正三位源朝臣繫姬者嵯峨天皇之女也天皇選妃未得其人太政大臣正一位藤原朝臣良房初參時悅其風採初嫁也

えだむろさにうつまくまほ

宴

えだむろさにうつまくまほと

うみのまら 二子ハツホ子也 第一ト玄心次ニ町トアリニ恩合シ

お代をうけてゆくん花あきハルトモウクぬとくらうとくらう

飛香舍藤宴 延喜御製

カクテコソニクホシケレカ代ヲ

藤三萬歳号有

紫ノ雲ニヤ三九苦ノ花

ひさゝ乃の車よてひさゝゆういとげニこくみばくじつた

乃日うげせりう一

庇御車

絲毛

金造

檳榔毛

綱代

きい乃^{シカ}木乃^{シカ}印をみゆ^ミもすんぐ
深山^{シカ}リ^{シカ}木^ナレ^ナ
ウタノロナリ

角^{カク}木^モ

良見ヨク^{ミル}也^{ミル}

ヨウカ^カ木^モこうち^モ

若苗色^{ウカカテ}ノ色^{ミタルト}

若鷄冠木也

づみ川^{ムツカワ}の木^モ

泉川木津川^{ムツカワ}也日本記^ハ桃川トアリト

津ト立音^{ミタニ}通セ山宗神天皇^{ミタニ}敵兵^{アキス}

都^{ミタニ}今日ミカノ原泉川

發イ造舟^{コウダシ}

志^シぞう絆^{モロコ}ど

退^{タク}

みぞく^{モロコ}わづく

因^{モロコ}所^{モロコ}

けさむじごふ

毎期^{モロコ}

蓬茅^{モロコ}の^{モロコ}經^{モロコ}て^{モロコ}乃^{モロコ}乃^{モロコ}を^{モロコ}て^{モロコ}乃^{モロコ}乃^{モロコ}み^{モロコ}ど^{モロコ}ハ

取金銭鉢^{モロコ}各^{モロコ}折^{モロコ}其半^{モロコ}授^{モロコ}使者^{モロコ}曰^{モロコ}為^{モロコ}我^{モロコ}謝^{モロコ}太上皇^{モロコ}謹獻^{モロコ}

是^{シカ}物^{シカ}尋^{シカ}旧好^{シカ}也長恨歌傳

魚鳥^{シカ}乃^{シカ}多^シ也^{シカ}少^シ也^{シカ}志^{シカ}げ^{シカ}を^{シカ}か^{シカ}て^{シカ}今^{シカ}を^{シカ}知^{シカ}る

タサレハニ^{シカ}ニ^{シカ}鳴^{シカ}魚鳥^{シカ}ノ^{シカ}方^{シカ}人九^{シカ}白^{シカ}鳥^{シカ}ノ^{シカ}チ^{シカ}シ^{シカ}巴^{シカ}鳴^{シカ}春^{シカ}野^{シカ}

カホニ^{シカ}ヘ^{シカ}忘^{シカ}ラレ^{シカ}ナクニ^{シカ}

春^{シカ}野^{シカ}鳴^{シカ}魚鳥^{シカ}ノ^{シカ}色^{シカ}立^{シカ}日^{シカ}

老甚醜^{シカ}リ^{シカ}ウリ^{シカ}フクロウ^{シカ}也

財故^{シカ}鳥^{シカ}鳥^{シカ}ノ^{シカ}名^{シカ}魚^{シカ}鳥^{シカ}

ト云^{シカ}也或說曰杜若^{シカ}カホ花^{シカ}ト云彼花咲比^{シカ}鳥^{シカ}鳴故^{シカ}也

又^{シカ}八^{シカ}雲^{シカ}秋^{シカ}云^{シカ}魚^{シカ}鳥^{シカ}春^{シカ}日^{シカ}山^{シカ}ヨナリ^{シカ}方^{シカ}急^{シカ}スルモノト云^{シカ}也

夜^{シカ}昏^{シカ}絕^{シカ}斯^{シカ}急^{シカ}ストイ^{シカ}テ^{シカ}ナクシハナリ^{シカ}春^{シカ}野^{シカ}ト云^{シカ}源氏物^{シカ}

詣^{シカ}モアリ^{シカ}是^{シカ}玄^{シカ}鳥^{シカ}ト定^{シカ}致^{シカ}但^{シカ}定^{シカ}家^{シカ}鄉^{シカ}不知^{シカ}之^{シカ}ト云^{シカ}推^{シカ}

テ^{シカ}只^{シカ}ウクシキ^{シカ}鳥^{シカ}欲^{シカ}能^{シカ}不^{シカ}決^{シカ}

九八

